

【生薬名】 唐独活 *ANGELICAE TUHOU RADIX*

【起源植物】 シシウド *Angelica pubescens*



【科名】 セリ科 *Umbelliferae*

【別名】 獨活、神農本草経では一名羌活・羌青・護羌使者とある

【薬用部分】 根と根茎

【主成分】 精油・フィトステロール

【薬性】 気味は辛苦微温、帰経は腎膀胱に属す

【効能】 ●祛風湿・通経絡

●鎮痛・鎮静・血管拡張作用がある

●風湿による痺痛に用い、特に項背部の筋肉や下半身の関節の風湿で背腰部・臀部・膝部のだるい痛みや脚の痺れなどによい

●風寒湿による頭痛や感冒に適する

●1日3～9gを煎服する

●止痛の効は羌活より強いが表散の効は羌活に及ばない

●リウマチや関節痛に両者を併用する事が多い

【出典】 ●獨活. 治風寒所擊. 金創. 止痛. 賁豚癩瘻. 女子疝瘕. 久服輕身耐老. (神農本草経上品)

●独活 甘苦、頸項舒び難く、両足湿痺、諸風を能く除く。(薬性歌)

●

【備考】 ●日本産ではウド*A. cordata*(ウキ科*Araliaceae*)を和独活として利用する

●

【処方例】 ●独活寄生湯、十味敗毒湯、疎経活血湯、千金三黄湯